

くわしたじょう  
桑下城跡

所在地	瀬戸市上品野町桑下 (北緯35度15分22秒 東経137度8分19秒)
調査理由	国道363号線改良工事
調査期間	平成17年1月～3月
調査面積	1,000㎡
担当者	酒井俊彦・樋上昇



調査地点 (1/2.5万「多治見」)

**調査の経過** 本遺跡は国道363号線の改良工事にとまなう事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成17年1月から3月にかけて実施した。調査面積は1,000㎡である。

**立地と環境** 桑下城跡は、瀬戸市東部にある品野盆地の北東部に位置し、水野(品野)川と蟹川にはさまれた標高約200mの丘陵上に立地する平山城である。

文献および地元の伝承によれば、桑下城は応仁の乱の際、東軍に属して敗れた美濃国安八郡今須城主長江氏の一族、長江利景(近地誌類では永井民部少輔)が尾張国春日井郡科(品)野の地に逃れて落合城(瀬戸市落合町)に入り、のちに築いた城とされている。長江利景は文明14(1482)年、今村城主の松原広長と大槇山・安土坂・若狭洞で戦って勝利を収め、瀬戸市一帯を手中にした。その後、16世紀に入ると、尾張・三河・美濃の国境に接するこの地は松平氏と織田氏で激しい勢力争いの場となり、享禄2(1529)年には松平清康(徳川家康の祖父)によって支配されるにいたる。そして、永禄3(1560)年、桶狭間の戦いの前哨戦として、前述の落合城や、水野川をはさんで桑下城の南側にある品野城とともに織田信長の攻撃を受けて焼失し、廃城となったとされている。

**調査の概要** 本年度は、蓬左文庫所蔵の絵図に残る桑下城の本丸および侍屋敷よりも西に位置する、丘陵西端部の調査をおこなった。その結果、のちに畑として改変は受けているものの、曲輪と考えられる平場を多数確認した。曲輪は、水野川に並行して走る中馬街道を意識して南側と西側のみ築かれ、北側は武者走りとおもわれるわずかな平坦面しか存在しない。また、曲輪間を移動するための道も確認されている。遺物は少ないものの、おおむね15～16世紀代に属する。

『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ』掲載の縄張り図や試掘調査の結果で、桑下城の範囲に入るか否か疑問視されてきた丘陵の西端部においても、曲輪が確認されたことから、桑下城跡は従来考えられてきた以上に大規模な城郭であり、その重要性があらためて認識されたといえる。今後、絵図にある侍屋敷の大半と本丸の北半部に調査がおよぶことから、その調査成果は戦国期の城郭研究に大きく寄与するものとおもわれる。(樋上 昇)



全景 東から



全景 北から